



使徒の働き 22章、26章

使徒行伝 パウロの弁明 22: , 26:

2017.8.10

22: エルサレム宮、千人隊長、民衆に (主は光でみる)	26: アグリッパ王. (主は全世界の主である)
3-5 熱心にパリサイ人 使命: 信者を縛り. エルサレムで処罰.	4-8 (イスラエル) 父の約束の望み 望み 死人の中からよみがえり
6-11 ダマスコの地に倒れて. 暗闇(盲目)に落ち込んで	9-10 祭司長の権限 迫害 悪 12-15 迫害X
12-16 Ptニヤのことは. 罪の赦し. 光へ	16-18 主が(王命) 罪をゆるし 赦す光 主 19-21 天からの啓示 悔改が全世界へ.
17-21 エルサレムから遠く異邦の民へ 使命: 主をあかし.	22-23 預言者モセの語. なこと. 復讐. 十字架とよみがえりの光.

使徒行伝で、パウロが自分が復活した死んで蘇った復活の主に、主の栄光を見るところ、復活の主にお会いするという箇所を引用して弁明するところが、特に2箇所22章と26章にあります。元々は9章の中にその話が出てきていますが、その箇所を見て、引用箇所2つが22章と26章です。

22章の方は、エルサレムの神殿のところに民衆が集まってきて、千人隊長に解散させられるというような感じなのですね。群衆が集まってきて困っているというところで、群衆に語りかけるというのが22章です。26章の方は、祭司長たちにローマに引き渡されるというところで、アグリッパ王の前(これはカイザリア)で、弁明するというところの2つです。

内容としては、ダマスコに行って光が差して倒れて、「サウル、サウル、なぜ私を迫害するのか」「あなたはどなたですか」「私はあなたを愛しているイエスである」というところが似ているのですが、22章の方は4つの段落(3-5、6-11、12-16、17-21)に分けられるでしょう。まずユダヤ人の中のユダヤ人というパウロは、エルサレムにナザレ人の一派を連れてくる。縛り上げて連れてくるという使命を持ってダマスコまで追いかけてく。ダマスコまで追いかけて行ったら、今度イエス様に会って、逆にイエス様に縛られる感じです。目が見えなくなる。連れの者たちに手を引かれながらダマスコに連れて行かれる。暗闇になる。今度はアナニヤが出てきて、「目が見えるようになります」ということを言われる。すぐに立って、御名を唱えて、バプテスマを受けて、罪を洗い落とす。パウロの復活です。この間ガラテヤ人への手紙の1章のところを見ると、

この(使徒22)16節と17節の間は3年ありますね。17節から21節のところは12日間エルサレムに上った時の話のようです。その時にエルサレムの宮で祈っている。神殿に行つて祈っているのですね。「遠く異邦の民につかわします」というように言われますから、殺すと縛って連れて行こうとしたら、縛られる。そして、そこから連れ出されて、目が開かれて光の側に来るわけですね。それで今度はエルサレムに引いて行こうとしていたのに、エルサレムから今度は遠く異邦の民へとつかわされるということで、逆転しているものが、この4つの段落で表されています。特に暗闇から光。殺そうと迫害していた者が、その殺した者の復活を証しすることになるという段落ですね。

26章も似てはいます。迫害しようとしています。迫害しようとしていたらイエスに会いました。それで「闇から光へ」と言われて、今度「異邦の民まで福音を伝えていくのですよ」ということを言われるという意味では、この真ん中の4つ(22:3-5、6-11、12-16、17-21)と、この4つ(26:9-11、12-15、16-18、19-21)は似ているのですが、出だし(4-8)と、終わり(22-23)のところに、父たち「古い時代、初めからの父たちに約束されていた望み、その復活の望みのために訴えられてるんですよ」と。「私は預言者モーセが昔から語ってたことを言っていただけです。それは死人の中からよみがえるということなのです」ということがあります。そのユダヤ人達が望みを持っている。その望みこそ、この望みなんですよという中で、先ほどの22章とちょっと違っていているところは、「祭司長たちから権限を与えられて迫害する」と。祭司長たちからの権限を受けて実行するということですね。今度、目が開いて立ち上がった時には、「これを伝える務めを任じますと。それで天から啓示に背かず」ということですので、ここで言う悪魔の支配から神のもとへ帰らせ、闇から光へということですけど、悪の支配から主の支配へというその支配の移行が、26章では、22章より強調されているように見えます。

後半の任命されている内容は、この国民と異邦人。ダマスコ、エルサレム、ユダヤ、異邦人。そして、この国民と異邦人ということで、主は全世界の救い主である、世の救い主である、世の王であるということが26章の方は強調されているかな。22章の方は主の光を見た、主が光である、その復活の主を見たという復活の栄光を見たということです。こちらの(22章)方は、このユダヤ人に対して復活した主を見ましたということが強調され、(26章の方は)王の前で証しする時には、これは世の救い主であるということが強調されているのかなと。それで、22章、26章の段落の中での弁明の位置付けというのを見る時に、この分析が役に立つんじゃないかと思っているわけです。

おまけですけど、22章の方に「私はエルサレムで育てられて生粋のユダヤ人だ。ガマリエルの膝元で先祖伝来の律法について厳しい薫陶を受けどうのこうの」ということがあるのですが、この「よく教えられた、訓練された」という言葉は、ステパノの説教の中で、モーセがエジプトで知恵を「教え込まれ」と言われてる言葉と同じです。40年間モーセは、家族、奥さんの実家ミデヤンの地で過ごします。ユダヤ人達に迫害されて、それで一度ミデヤンに逃げて、それから40年経って戻ってきました。ここでパウロも、タルソに14年間行く感じですね。タルソは自分の出身地ですから、一度自分の出身地で守られて、そこで働きをして、いよいよ働きの時だということで戻ってくるという意味で、パウロとモーセが似てるようなものなのだとは、こういう小さなところのしるしでも分かるかと思います。